史跡 斎宮跡

平成29年度発掘調査概報

2018年11月

斎宮歴史博物館

第192次調査区全景（北東から）　〔写真右奥は堀坂山〕

序

斎宮歴史博物館は、平成30年10月で開館30周年を迎えます。31年３月には斎宮跡が国史跡に指定されて40年目、同年７月は「三重県斎宮跡出土品」として重要文化財に指定されて10年目にあたります。翌32年度は、斎宮跡の発掘調査が始まって半世紀を迎える予定であり、記念すべき事柄が重なる節目の時期に位置づけられます。今後とも斎宮歴史博物館では、全国で唯一無二の遺跡となる斎宮を体感できるサイトミュージアムとして、国内を問わず海外へも視野を向けていっそう魅力ある発信を続けてまいります。

さて、今回報告する発掘調査は、斎宮の成立にかかる実態を解明するため、史跡西部の中垣内地区で行ったものです。調査地の隣接地では、史跡斎宮跡でも最も古い飛鳥時代後半期とみられる掘立柱塀及び建物群が確認されています。これらを飛鳥時代の斎宮中枢域と推定し、その構造を確認することを目的とした調査でしたが、明確に把握するには至りませんでした。一方、古墳時代中～後期の竪穴建物が確認され、「初期斎宮」造営以前には古墳時代集落が存在することが判明しました。この調査で得られた成果は、地元明和町をはじめ、ひろく県民の皆様や斎宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。

史跡斎宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、斎宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡斎宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2018（平成30）年11月

斎宮歴史博物館
館　長　　明　石　典　男

例　　言

1　本書は、斎宮歴史博物館が平成29年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第192次調査）の概要をまとめたものである。

2　明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第191次調査報告書は、別途明和町が刊行する予定である。

3　遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を規準として表記している。

4　遺構時期区分の指標となる土器の分類と年代観については、以下の文献に拠った。

・斎宮歴史博物館2001「斎宮跡の土器」『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』

・大川勝宏2010「斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究」『斎宮歴史博物館研究紀要』19 斎宮歴史博物館

・大川勝宏2005「平安時代後期の斎宮跡」『明和町史 斎宮編』明和町史編さん委員会

5　斎宮跡の時期区分については土器の編年に基づき、期と段階を用いて「斎宮跡Ⅱ期第１段階」等と表記すべきであるが、本文中ではこれを簡略に「斎宮Ⅱ-1期」と表現している。

6　遺構表示記号は次のとおりである。

ＳＡ：柱列・塀　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＨ：竪穴建物　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑

ＳＰ：柱穴・ピット　ＳＺ：不明遺構

7　遺物実測図は基本的に実物の４分の１で行っている。遺物写真は縮尺不同である。

8　土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第５版（1989年）を用いて補っている。

9　遺物の漢字表現は、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いる。ただし、参考文献からの引用の場合にはこの限りではない。

10　本書の執筆・遺物写真の撮影は、川部浩司があたり、編集は調査研究課で行った。また発掘調査は川部が担当し、現地調査及び資料整理については、大川勝宏・穂積裕昌・山中由紀子・宮原佑治・八木光代・西川千晶・森本周子が補佐した。

目　　次

Ⅰ　前言 …… 1
Ⅱ　第192次調査 …… 7
Ⅲ　第192次調査周辺の既往調査 …… 18

挿 図 目 次

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図 …… 4
第Ⅰ－２図　平成29年度発掘調査位置図 …… 5
第Ⅰ－３図　史跡斎宮跡における大地区表示図 …… 6
第Ⅱ－１図　第192次調査　調査区位置図 …… 8
第Ⅱ－２図　第192次調査　グリッド図 …… 9
第Ⅱ－３図　第192次調査　遺構平面図 …… 10
第Ⅱ－４図　第192次調査　土層断面図 …… 11
第Ⅱ－５図　第192次調査　出土遺物実測図 …… 13
第Ⅱ－６図　史跡斎宮跡　中垣内地区　遺構配置図〔全体図〕 …… 15
第Ⅲ－１図　史跡斎宮跡　中垣内地区　遺構配置図〔弥生時代〕 …… 19
第Ⅲ－２図　史跡斎宮跡　中垣内地区　遺構配置図〔古墳時代〕 …… 20
第Ⅲ－３図　史跡斎宮跡　中垣内地区　遺構配置図〔飛鳥・奈良時代〕 …… 21
第Ⅲ－４図　第85－8次調査　塀・掘立柱建物①　遺構平・断面図 …… 22
第Ⅲ－５図　第85－8次調査　掘立柱建物②　遺構平・断面図 …… 23
第Ⅲ－６図　第30・58－4・81－7・85－8・132・144・189次調査
出土遺物実測図 …… 24

表 目 次

第Ⅰ－１表　平成29年度史跡斎宮跡の現状変更等許可申請一覧表 …… 3
第Ⅰ－２表　平成29年度発掘調査一覧表 …… 3
第Ⅱ－１表　第192次調査遺構一覧表 …… 12
第Ⅱ－２表　第192次調査 遺物観察表① …… 16
第Ⅱ－２表　第192次調査 遺物観察表② …… 17
第Ⅲ－１表　第30・58－4・81－7・85－8・132・144・189次調査
遺物観察表① …… 25
第Ⅲ－２表　第30・58－4・81－7・85－8・132・144・189次調査
遺物観察表② …… 26

写 真 図 版 目 次

巻頭図版　第192次調査区全景（北東から）
写真図版１　調査区全景（南西から）／調査区全景（南から） …… 27
写真図版２　調査区全景（西から）／調査区全景（北から） …… 28
写真図版３　竪穴建物ＳＨ11091全景（北西から）
溝ＳＤ11092全景（北西から） …… 29
写真図版４　第192次調査出土遺物（１） …… 30
写真図版５　第192次調査出土遺物（２） …… 31

Ⅰ　前　　言

1　調査の経緯と概要

史跡斎宮跡にかかる経緯と経過

斎宮跡の発見の契機は、高度経済成長期に斎宮段丘面の西縁部で大規模な宅地造成計画がなされ、その開発事業に先立って実施された昭和45年の斎宮跡（古里遺跡）の確認調査による。大型の建物を含む数多くの掘立柱建物、井戸、土坑、奈良時代と鎌倉時代の大溝、蹄脚硯や大型赤彩土馬、緑釉陶器などが発見され、斎宮関連の重要遺跡と認識された。昭和48年度から文化庁の補助事業として確認調査を重ね、昭和54年３月27日に国史跡に指定され、東西２㎞、南北700ｍに及ぶ137ha の史跡範囲が把握されるに至った。管理団体は明和町である。

三重県では、史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査にあたり、平成元年度からは新たに開館した斎宮歴史博物館によって、史跡の内容確認のための計画的な学術調査を継続的に実施している。

斎宮跡の発掘調査では、史跡東部に所在する方格地割と平安時代の斎宮中枢部の具体的な解明が進展した。平成27年度には柳原区画で平安時代前期の斎宮寮庁（正殿・西脇殿・東脇殿）を対象に、活用のための史跡整備の一環として復元建物を建設し、史跡公園「さいくう平安の杜」が公開活用されている。

明和町では「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取組み、平成24年６月６日に国の認定を受けた。同計画に基づいて、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした整備を計画し、平成24年度に発掘調査を行い、平成27年度から工事に着手、平成29年３月に「いつきのみや地域交流センター」が竣工した。さらに、平成27年４月24日には「祈る皇女斎王のみやこ斎宮」が日本遺産に認定されている。

史跡斎宮跡の発掘調査

昭和45年の斎宮跡（古里遺跡）の確認調査（第１次）を皮切りに、史跡内容確認の計画的な学術調査、現状変更等に伴う調査が積み重ねられ、今回の第192次調査で47年目を迎えた。これまで史跡東部の平安時代斎宮にかかる方格地割内部の発掘調査に重点を置き、具体的な構造の解明に取り組んできた。これらの成果を毎年、発掘調査概報としてまとめているが、斎王の宮殿「内院」、柳原区画の「斎宮寮庁」については正式な発掘調査報告書を刊行している。今後は「寮庫」・「古代伊勢道」・「初期斎宮」などにかかる発掘調査報告書を順次刊行していく方針である。

平成29年３月に斎宮歴史博物館では、史跡斎宮跡発掘調査の考え方や調査計画をまとめた『史跡斎宮跡発掘調査基本方針』を策定した。当該方針等での史跡内容確認は、初現期（飛鳥～奈良時代）の斎宮の実態解明、方格地割内部構造の解明、衰退期（平安～鎌倉時代）の斎宮の実態解明、斎宮に関わる居住、生産・流通、墓域等の解明の４項目を課題に挙げた。今日的かつ当面の重点目標として、史跡西部での飛鳥～奈良時代の斎宮中枢域の調査を掲げている。今回の学術調査はその初年度に相当する。

発掘調査の黎明期に斎宮跡の重要性が見出された古里地区から中垣内地区にかけて、古代伊勢道と枝分かれする南北の派生道路を中心に、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物と竪穴建物が多数確認されている。広範に計画的な遺構配置をみせることから、当該期の公的施設が展開すると推定される。

史跡西部の飛鳥・奈良時代斎宮の実態解明は、中垣内地区で斎宮段丘面（段丘中位面）の南西縁域に奈良・平安時代の掘立柱塀からなる正方位の方形区画が確認されており、当該期の中枢施設が展開するものと想定できる。いずれも区画域の規模は把握されたが、その内部の具体的

な構造について実態解明には至っていない。飛鳥時代斎宮の推定区画は、古代伊勢道の派生道路と敷設軸に合わせた掘立柱の塀や建物、竪穴建物で構成されているとみられる。斎宮の成立を考える上で、まずは推定区画範囲や当該期遺構の広がりを把握することが求められた。

上記の課題を受け、平成29年度は中垣内地区の実態解明を目的として、第192次調査を実施した。調査面積は166.6㎡で、調査期間は平成29年12月１日～平成30年３月15日であった。実働日数は21日間を要した。

発掘調査現場の公開活用

斎宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上のために、発掘調査現場の積極的な公開活用を行っている。具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や「さいくう夏休み発掘体験ウィーク」、「大人のための１日体験発掘講座」、学校等団体の体験発掘を開催している。また、三重大学及び皇學館大学との連携を行い、大学院生・学部生を対象とした調査アシスタントの受け入れを行っている。

第192次調査の随時公開・説明の見学者はのべ136人、平成30年２月17日に開催した現地説明会の参加者は55名、第190次調査での体験発掘参加者はのべ226人であった。これらの公開活用については、三重大学及び皇學館大学の調査アシスタントの参加を得た。

2　調査体制

史跡斎宮跡の調査研究・整備活用に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究課が担当した。当該報告に関わる組織は以下の体制で行った。

＜第192次調査＞

・平成29年度

大川勝宏（課長）
穂積裕昌（主幹(課長代理)）
川部浩司（主査）
宮原佑治（主任）

・平成30年度

大川勝宏（課長）
山中由紀子（主幹(課長代理)）
川部浩司（主査）
宮原佑治（主任）

3　斎宮跡調査研究指導委員会

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、平成29年２月12日に斎宮跡調査研究指導委員会を開催し、第192次調査を含む中垣内地区の性格や明和町の整備事業について指導及び助言を得た。指導委員の方々は下記のとおりである。

〔指導委員〕

浅野　聡　（三重大学大学院准教授）
稲葉信子　（筑波大学大学院教授）
小澤　毅　（三重大学教授）
金田章裕　（京都大学名誉教授）
黒田龍二　（神戸大学大学院教授）
佐々木恵介（聖心女子大学教授）
増渕　徹　（京都橘大学教授）
松村恵司　（奈良文化財研究所長）
本橋裕美　（愛知県立大学准教授）
渡辺　寛　（皇學館大学名誉教授）
綿貫友子　（神戸大学大学院教授）

（五十音順・敬称略）

4　平成29年度発掘調査一覧

文化財保護法第125条第１項の規定による史跡現状変更等許可申請のうち、平成29年度は38件（国許可10件、県許可28件）があった。このうち、当該許可申請の許可条件に基づく史跡斎宮跡の発掘調査及び立会いを要した案件については、その内訳を第Ｉ－１表、発掘調査を実施した内容は第Ｉ－２表にまとめた。

明和町主体の第191次調査については、『史跡斎宮跡　平成29年度　現状変更緊急発掘調査報告』として、平成30年度に明和町が刊行する予定である。

なお、三重県が実施した第190次調査は、『史跡斎宮跡　平成30年度発掘調査概報』として、平成31年度に斎宮歴史博物館での刊行を予定している。

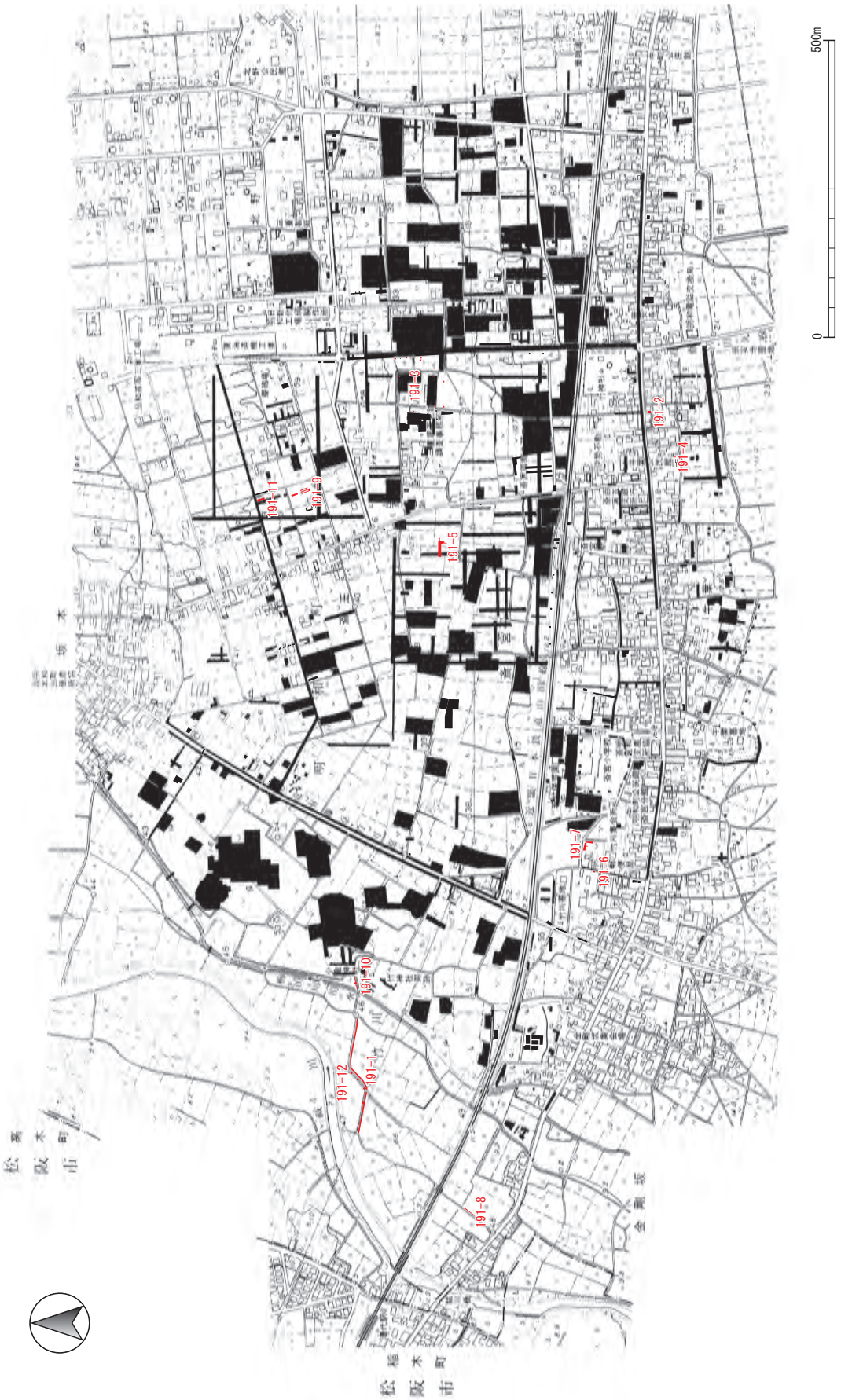
現状変更等許可申請の内容	申請及び許可件数	対応別件数
個人・民間企業による申請	20	発掘調査 5、立会い 15
明和町による地域環境整備に伴う申請	2	立会い 2
明和町等による史跡環境整備及び維持管理に伴う申請	14	発掘調査 2、立会い 12
三重県による計画的発掘調査のための申請	2	発掘調査 2

第Ⅰ－１表　平成29年度史跡斎宮跡の現状変更等許可申請一覧表

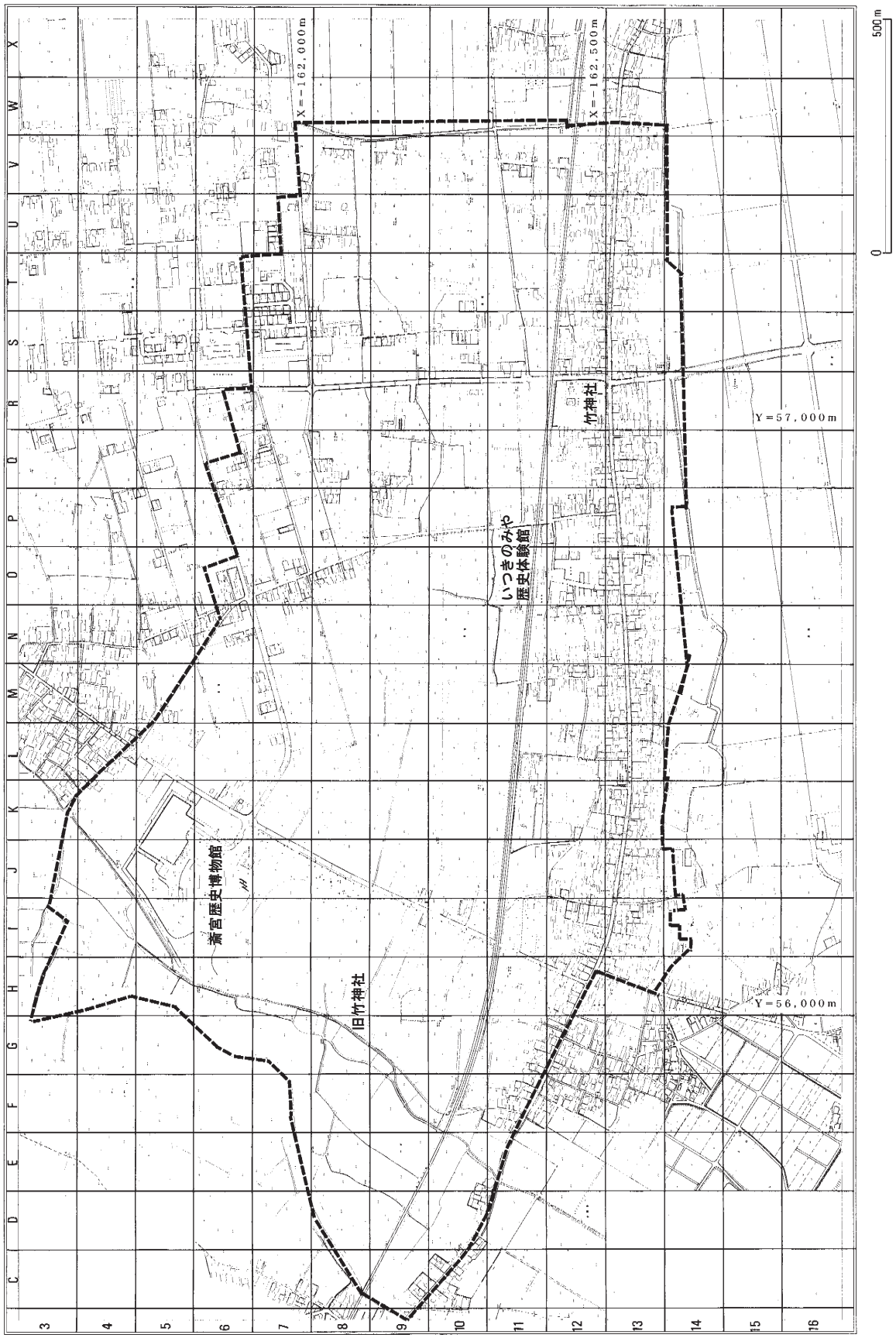
調査次数	地区	調査面積（㎡）	調査期間	調査場所	現状変更申請者	現状変更申請理由	保存管理の土地利用区分
190	I9	106.0	H29.7.24～継続中	明和町大字竹川字中垣内	三重県	計画発掘調査	第二種保存地区
192	F10	166.6	H29.12.1～H30.3.15	明和町大字竹川字中垣内	三重県	計画発掘調査	第二種保存地区
191-1	E8,F8,G8	186.1	H29.6.29～9.8	明和町大字竹川字祓戸ほか	明和町	散策路整備	第三種保存地区
191-2	Q13	3.4	H29.4.26	明和町大字斎宮字牛葉	個人	建物建築	第四種保存地区
191-3	R8,Q9,R9	14.0	H29.6.20～7.4	明和町大字斎宮字下園	明和町	史跡整備	第一種保存地区
191-4	P13	3.0	H29.6.12	明和町大字斎宮字牛葉	個人	住宅建築	第四種保存地区
191-5	O9	161.2	H29.6.26～7.11	明和町大字斎宮字宮ノ前	明和町	園路整備	第一種保存地区
191-6	I12	2.2	H29.9.27	明和町大字竹川字東裏	個人	住宅建築	第四種保存地区
191-7	J12	65.3	H29.11.1～11.27	明和町大字竹川字東裏	個人	住宅建築	第三種保存地区
191-8	D10	19.7	H29.12.19～12.20	明和町大字竹川字祓戸	明和町	散策路整備	第三種保存地区
191-9	P7	86.0	H30.1.10～1.27	明和町大字斎宮字楽殿	個人	住宅建築	第三種保存地区
191-10	H8	57.1	H30.1.29～3.27	明和町大字竹川字古里	明和町	散策路整備	第一種保存地区
191-11	P6	52.0	H30.3.15～3.28	明和町大字斎宮字楽殿	個人	盛土	第三種保存地区
191-12	F8	11.8	H29.7.3	明和町大字竹川字祓戸	明和町	散策路整備	第三種保存地区

第Ⅰ－２表　平成29年度発掘調査一覧表

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図（1：50,0000・国土地理院1/25,000「松阪」「明野」を改変）



第Ⅰ－２図　平成２９年度発掘調査位置図（１:10,000）



第Ⅰ－３図　史跡斎宮跡における大地区表示図（2002年策定）

Ⅱ　第192次調査

（６ＡＦ10 中垣内地区）

１　はじめに

第192次調査地は、史跡西部の中垣内地区でも南西部の近鉄山田線の線路北側に所在する。斎宮段丘面（段丘中位面）の段丘崖から沖積低地に西方へ張り出す箇所に位置し、発掘調査前は畑地として土地利用されている。

調査地周辺の既往調査は、第16－4次・16－5次・16－6次・58－4次・81－7次・85－8次・100次・144次・146次・182－1次・189次調査などが行われている。従前より「初期斎宮」と呼称されてきた飛鳥・奈良時代の斎宮中枢域の関連遺構では、掘立柱塀、掘立柱建物、竪穴建物、土坑、溝などが検出されている。特に第58－4次・146次・182－1・189次調査で確認された掘立柱塀による２つの正方位の方形区画は、一辺１ｍを超えるような柱掘形かつ柱間約2.4ｍと大型の規模をもつことから、奈良時代の斎宮中枢域とみて大過ない。

飛鳥時代斎宮の推定区画は、第85-8次調査で古代伊勢道の派生道路の敷設軸に合わせた（Ｎ33°Ｅに傾く方位に並ぶ）掘立柱塀や掘立柱建物で構成するとみられる。掘立柱塀（ＳＡ6280）は布掘柱穴の塀であり、一辺1～1.4ｍの柱掘形、柱間2.1～2.4ｍを測る。掘立柱建物は塀の東西に５棟分が確認され、布掘の総柱建物（ＳＢ6279）、総柱建物（ＳＢ6301）、側柱建物（ＳＢ6278・6281・6292）となる。いずれも柱穴出土の土器は細片のため、明確な時期比定には至らない。飛鳥時代とする時期決定の根拠は、前述した奈良時代以前と想定される古代伊勢道派生道路の敷設軸に合わせた塀・建物軸とその配置状況で推定しているのが現状である。

一方、第85－8次調査地の南東側の第189次調査では、竪穴建物（ＳＨ11013・11014）が配置する。平面形は隅丸長方形を呈し、壁周溝はあるが主柱穴や貯蔵穴、造付カマドは検出されない特徴がある。床面より飛鳥Ⅲ期に比定される須恵器杯Ｇ蓋が出土し、埋土上層には鞴羽口や椀形滓がみられることから、飛鳥時代斎宮の造営に関わる工房の可能性が想定されている。

今回の第192次調査では、第85－8次調査の掘立柱塀（ＳＡ6280）を区画の東辺と推定し、それに対面する西辺を確認することによって飛鳥時代斎宮の区画推定範囲を確定、あるいは区画内部の様相を把握する目的で実施した。

第192次調査の調査面積は166.6㎡、調査期間は平成29年12月１日～平成30年３月15日である。

２　地形環境と地層

史跡斎宮跡は、紀伊山地に端を発する櫛田川（祓川）・宮川の下流域に挟まれた明野原台地の西方に位置する。後背の玉城丘陵・大仏山丘陵を基点として、そこから北へ洪積台地の段丘高位面（明野段丘面）、段丘中位面（斎宮段丘面）の順に地形は下降し、東西に広がる沖積低地（海岸平野・氾濫平野・三角州・後背低地）を介して、伊勢湾へと連なる。

史跡斎宮跡は、段丘中位面（斎宮段丘面）に立地し、史跡西域の段丘南西部を最高所（標高14.5ｍ程度）として、全体に東北東に向けて緩やかに下へ傾斜し、史跡の東域では標高９ｍ程度となる。傾斜角度は1°にも達しないほどの平坦な地面となっている。

第192次調査地は、段丘西縁の現況が畑地の平坦面で、約14ｍの標高を測り沖積低地から３～４ｍの比高がある。

基本層序は上から、表土（耕作土）、造成土（耕作地造成時）、遺物包含層１（飛鳥～平安時代）、遺物包含層２（古墳時代）、遺物包含層３（弥生時代）、地山からなり、地山面までの深度は北端で0.3ｍ、南端で0.6ｍを測る。遺構の検出は、本来であれば遺物包含層１・２・３の

第Ⅱ－１図　第192次調査　調査区位置図（1/2,000）

上面で行うべきだが、包含層と遺構埋土の砕屑物構成及び色調が似ているため、遺構検出が極めて困難となる。誤認を回避するために、遺構の正しい認識が可能となる地山上面で行った。

3　遺構

調査の結果、弥生時代・古墳時代・飛鳥～奈良時代・鎌倉時代以降の各種遺構を検出した。その内訳は弥生時代の溝１条、土坑１基、ピット２基、古墳時代の竪穴建物１棟以上、飛鳥～奈良時代の溝1条、鎌倉時代以降の溝６条となる。また、掘立柱建物と考えられる柱穴を検出したものの、建物配置や規模、帰属時期などの詳細は判然としないものがある。

（１）縄文・弥生時代の遺構及び関連地層

遺物包含層　包含層中より調査区北半部で縄文土器、調査区全域で弥生土器の破片が出土している。縄文土器は縄文時代中期末、弥生土器は弥生時代前期後葉を中心とする。包含層のほかに飛鳥時代以降の遺構や樹木根痕あるいは風倒木痕から出土している。なお、縄文時代遺構は確認していない。

ＳＰ1・ＳＰ2　調査区北半部で柱穴１基、ピット１基を確認した。弥生土器・磨石の破片（24～26）が出土している。柱穴掘形は直径0.4m、柱幅0.2m弱を測るが、組み合う他の柱穴は確認できない。いずれも弥生時代前期後葉～中期前葉に帰属する。

ＳＤ11090　n･o05で検出したＬ字状の溝である。溝と報告するが、長方形土坑が重複している可能性がある。弥生時代前期後葉～中期前葉に帰属する。

ＳＫ11099　n04で検出した直径２m以上を測る不整形の土坑である。弥生時代前期後葉～中期前葉に帰属する。

ＳＺ11100　n04･05で検出した深さ約0.2mを測る落ち込み状の遺構である。弥生時代前期後葉～中期前葉に帰属する。

（２）古墳時代の遺構

ＳＨ11091　o05，p04･05で検出した幅3.3m、長さ3.6m以上の平面形が隅丸方形の竪穴建物である。建物遺構の上面は大きく削平されているが、壁周溝と中央土坑を検出した。主柱穴や貼床は確認していない。簡易的な建物構造をもつとみられる。中央土坑より土師器細片が出土しているが、時期比定は困難である。第85－8次調査をはじめとする周辺調査で確認された竪穴建物の主軸が同様であり、建物構造や規模も似ているため、古墳時代中期後半～後期前半に帰属するとみられる。

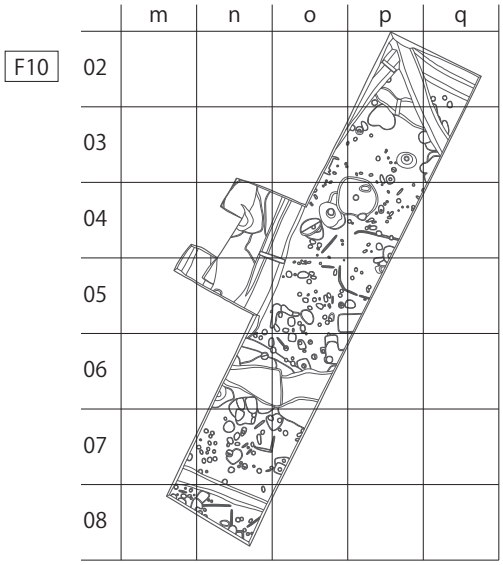
調査区南側で壁周溝と推定されるＬ字状の小溝を４箇所確認している。竪穴建物の可能性はあるが、根拠に乏しい。

（３）飛鳥～奈良時代の遺構

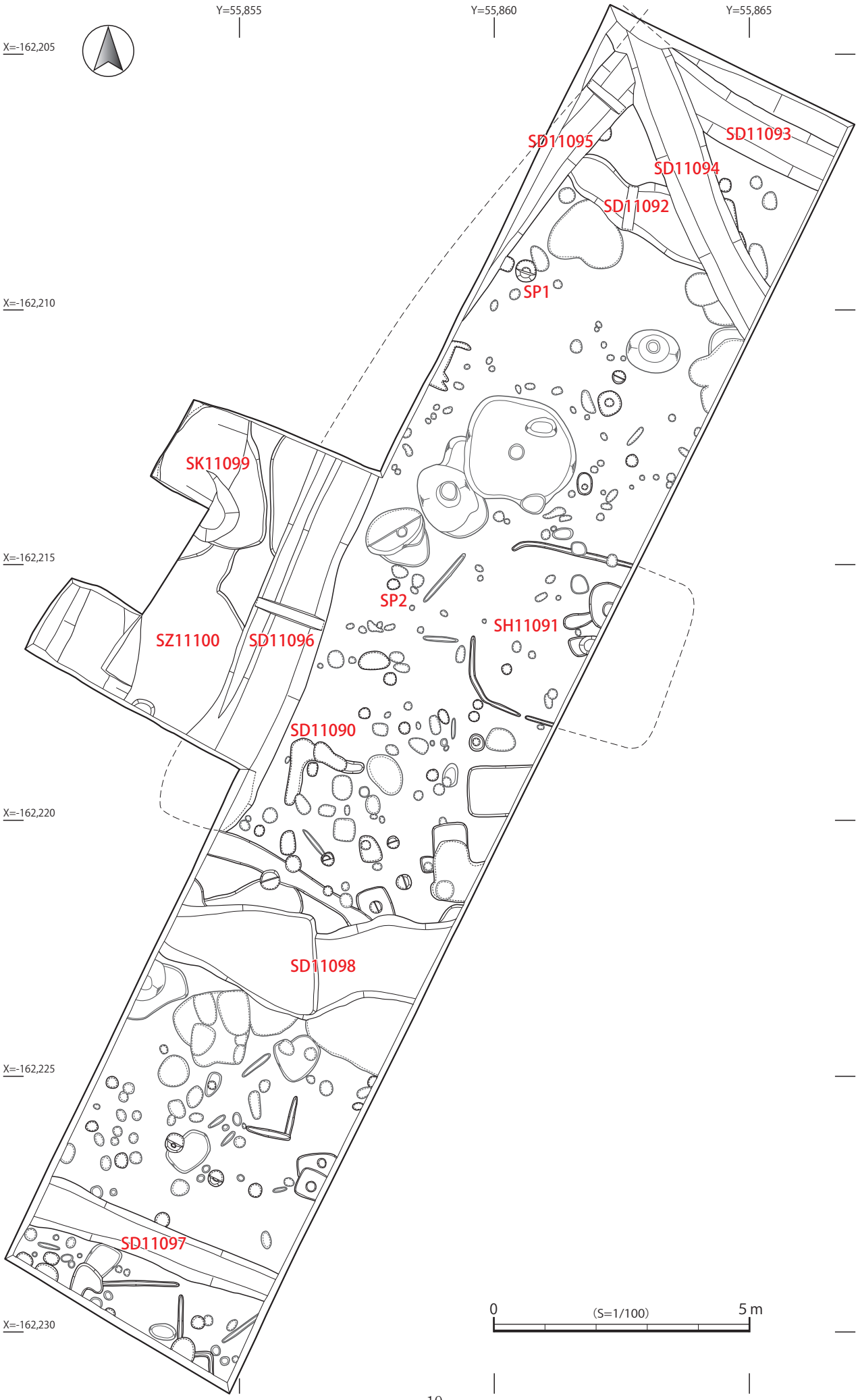
ＳＤ11092　p･q02･03で検出した幅0.8～1.3m、長さ3.5mの不整な平面形をもつ土坑状の溝である。検出面からの深さは0.1m程度と浅い。須恵器杯Ｂ蓋（2・3）が出土していることから、斎宮Ｉ－1期に帰属する。

（４）鎌倉時代以降の遺構

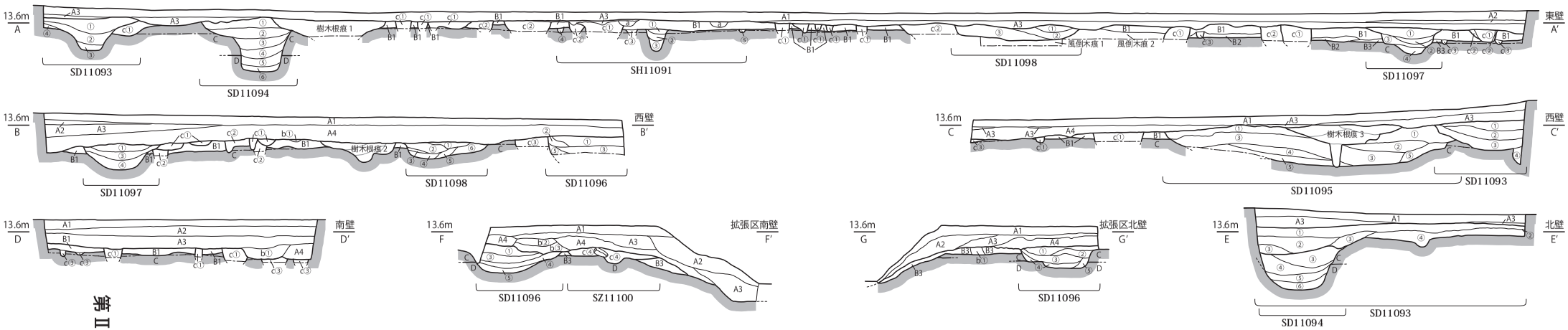
ＳＤ11093～11098　いずれも直線主体の溝であり、土地区画や排水機能を有するものと推測される。ＳＤ11093は近現代～現代、ＳＤ11094・ＳＤ11095・ＳＤ11096・ＳＤ11097・ＳＤ11098は鎌倉～室町時代に帰属する。



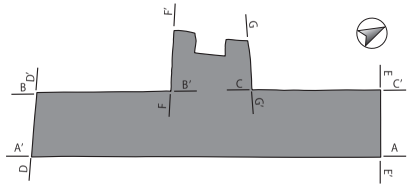
第Ⅱ－２図　第192次調査 グリッド図（1/400）



第Ⅱ－３図　第192次調査　遺構平面図（1/100）



0 (S=1/100) 4m



【遺構埋土】

〔SH11091〕（A-A′）
① 褐色 (7.5YR4/3) 極細粒砂～シルト
② 暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂～シルト
③ 黒褐色 (7.5YR2/2) 極細粒砂～シルトに赤褐色 (5YR4/6) シルト (偽礫) 含む
④ にぶい褐色 (7.5YR5/4) シルト
⑤ にぶい褐色 (7.5YR5/4) シルトに褐色（7.5YR4/4）シルト (偽礫)15% 含む

〔SD11093〕（A-A′ / C-C′ / E-E′）
① にぶい赤褐色 (5YR4/4) 極細粒砂～シルトに②層偽礫 5% 含む
② にぶい赤褐色 (5TR4/3) 極細粒砂～シルト
③ 褐色 (7.5YR4/6) 極細粒砂～シルト

〔SD11094〕（A-A′ / E-E′）
① 褐色 (7.5YR4/4) 極細粒砂～シルト
② 暗褐色 (7.5YR3/4) 極細粒砂～シルト
③ 暗褐色 (7.5YR3/4) 極細粒砂～シルトに C 層偽礫・炭化粒 5% 含む
④ 暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂～シルトに C 層偽礫・炭化粒 15% 含む
⑤ 暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂～シルトに C 層偽礫・炭化粒 30% 含む
⑥ 暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂～シルトに C 層偽礫・炭化粒 20% 含む

〔SD11095〕（C-C′）
① にぶい赤褐色 (5YR4/4) 極細粒砂～シルト
② 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂～シルト
③ 褐色 (7.5YR4/3) 極細粒砂～シルトに①層偽礫 15% 含む
④ 暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂～シルト
⑤ 暗褐色 (7.5YR3/4) 極細粒砂～シルトに C 層偽礫 15% 含む

〔SD11096〕（B-B′ / F-F′ / G-G′）
① にぶい赤褐色 (5YR4/4) 極細粒砂～シルト
② 褐色 (10YR4/4) 極細粒砂～シルト
③ 褐色 (7.5YR4/3) 極細粒砂～シルトに①層偽礫 15% 含む
④ 暗褐色 (7.5YR3/3) 極細粒砂～シルト
⑤ 暗褐色 (7.5YR3/4) 極細粒砂～シルトに C 層偽礫 15% 含む

〔SD11097〕（A-A′ / B-B′）
① 褐色 (7.5YR4/4) 極細粒砂～シルト
② 褐色 (7.5YR4/3) 極細粒砂～シルトに C 層偽礫 5% 含む
③ 褐色 (7.5YR4/4) 極細粒砂～シルトに C 層偽礫 15% 含む
④ 褐色 (7.5YR4/3) 極細粒砂～シルトに C 層偽礫 30% 含む

〔SD11098〕（A-A′）
① 暗赤褐色 (5YR3/4) 極細粒砂～シルト
② 暗赤褐色 (5YR3/3) 極細粒砂～シルト
③ 暗赤褐色 (5YR3/2) 細粒砂～シルト

〔SD11098〕（B-B′）
① 褐色 (10YR4/4) シルトと C 層偽礫の混淆土
② にぶい褐色 (10YR4/3) シルトと C 層偽礫の混淆土
③ にぶい褐色 (10YR5/3) シルトと C 層偽礫の混淆土
④ 灰黄褐色 (10YR4/2) シルトと C 層偽礫の混淆土
⑤ 灰黄褐色 (10YR5/2) シルトと C 層偽礫の混淆土
⑥ 褐色 (10YR4/4) シルトと C 層偽礫の混淆土

〔樹木根痕 1〕（A-A′）
褐色 (7.5YR4/3) シルトと C 層偽礫の混淆土

〔樹木根痕 2〕（B-B′）
褐色 (10YR4/4) シルトと C 層偽礫の混淆土

〔樹木根痕 3〕（C-C′）
褐色 (7.5YR4/3) シルトと C 層偽礫の混淆土

〔風倒木痕 1〕（A-A′）
黒褐色 (7.5YR2/2) シルト

〔風倒木痕 2〕（A-A′）
褐色 (7.5YR4/3) 細粒砂～シルトに礫が多く混じる

【基本層序】

作土・客土層

A1	（作土）	灰褐色 (5YR4/2) 細粒砂～シルト
A2	（客土①）	にぶい赤褐色 (5YR5/4) 細粒砂～シルト
A3	（客土②）	にぶい赤褐色 (5YR4/3) 細粒砂～シルトに礫含む
A4	（客土③）	にぶい褐色 (7.5YR5/4) と暗褐色 (7.5YR3/3) のシルト (偽礫) による混淆土

遺物包含層

B1	（包含層①）	暗褐色 (7.5YR3/4) シルトに C 層偽礫・炭化粒が 10% 含む
B2	（包含層②）	暗褐色 (7.5YR3/4) シルトに C 層偽礫・炭化粒が 30% 含む
B3	（包含層③）	暗褐色 (7.5YR3/3) シルトに黒褐色 (7.5YR2/2) と C 層の偽礫・炭化粒 10% 含む

地山層

C	（地山①）	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細粒砂～シルト
D	（地山②）	段丘礫主体（C 層含む）

遺構埋土

a	（新相）	にぶい褐色 (7.5YR5/3) 細粒砂～シルトと明褐色 (7.5YR5/6) シルト（偽礫）の混淆土
b①（新相）		にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂～シルトに暗褐色 (7.5YR3/3) シルト (偽礫)30% 含む
b②（新相）		にぶい褐色 (7.5YR5/4) 細粒砂～シルトに橙色 (7.5YR6/6) シルト (偽礫)30% 含む
b③（新相）		橙色 (7.5YR6/6) 細粒砂～シルトにに ぶい褐色 (7.5YR5/4) シルト (偽礫)10% 含む
c①（古相）		褐色 (7.5YR4/3) 極細粒砂～シルトに明赤褐色 (5YR5/6) シルト (偽礫)5% 含む
c②（古相）		褐色 (7.5YR4/4) 細粒砂～シルトに明赤褐色 (5YR5/6) シルト (偽礫)10% 含む
c③（古相）		にぶい褐色 (7.5YR5/4) シルトに暗褐色 (7.5YR3/3) シルト (偽礫)5% 含む
c④（古相）		暗褐色 (7.5YR3/3) シルトに黒褐色 (7.5YR2/2) シルト (偽礫)10% 含む

第Ⅱ－4図　第192次調査　土層断面図（1/100）

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物
ＳＤ 11090	溝３	n･o-15	弥生時代前期	弥生土器
ＳＨ 11091	竪穴建物	0-15, p-04･05	古墳時代中～後期	土師器
ＳＤ 11092	溝７	p･q-02･03	Ⅰ－１ (飛鳥Ⅴ～平城宮Ⅰ)	須恵器杯蓋
ＳＤ 11093	溝１	p･q-02･03	近現代～現代	弥生土器･土師器･陶器
ＳＤ 11094	溝２	p･q-02･03	鎌倉時代以降	弥生土器･土師器･須恵器
ＳＤ 11095	溝４	p-02･03	鎌倉時代以降	弥生土器･土師器･須恵器･灰釉陶器
ＳＤ 11096	溝５	o-04･05, n-04, p･q-03	鎌倉時代以降	縄文土器･弥生土器･土師器･須恵器･灰釉陶器･白磁･石製品(打製石斧)
ＳＤ 11097	溝６	m･n-08	鎌倉時代以降	弥生土器･土師器
ＳＤ 11098	溝８	n･o-06	鎌倉時代以降	土師器･須恵器･炭化物
ＳＫ 11099	土坑６	n-04	弥生時代前期	弥生土器･土師器
ＳＺ 11100	落ち込み	n-04･05	弥生時代前期	弥生土器
ＳＰ 1	p03:P2	p-03	弥生時代前期	土師器
ＳＰ 2	o04:P4	o-04	弥生時代前期	弥生土器･石製品(磨石)

第Ⅱ－１表　第192次調査遺構一覧表

4　遺物

遺物整理用コンテナ７箱分の遺物が出土した。遺物点数は遺構出土より、遺物包含層の方が多い。遺構番号順に主な時代ごとに分けて詳述する。

ＳＤ11090出土遺物（1）　弥生土器の壺胴部片で、篦描沈線文７条以上を施す。

ＳＤ11092出土遺物（2・3）　須恵器杯Ｂ蓋の破片で、同一個体の可能性が高い。いずれも宝珠摘みが欠損した頂部はわずかに窪み、口縁端部は真下に垂下する。復原口径は14.8㎝程度を測り、飛鳥Ⅴ～平城宮Ⅰ期の特徴をもつ。

ＳＤ11093出土遺物（4）　弥生土器の壺胴部片で、貼付突帯1条と篦描沈線文１条を施す。

ＳＤ11095出土遺物（5・6）　**5**は灰釉陶器小皿の破片で、内面に灰釉を塗布する。平安時代に帰属する。**6**は弥生土器の壺頸胴部の破片で、頸胴部界に貼付突帯１条がめぐり、その下位に櫛描波状文、上位に竹管状工具の刺突による列点文２段を施す。

ＳＤ11094出土遺物（7～11）　**7**は土師器甕の口縁部片。**8**は須恵器壺の胴部片。**9**は復原口径12.7㎝の須恵器杯Ａ。**10**は復原口径17.6㎝の土師器皿。いずれも奈良時代に帰属する。**11**は弥生土器壺の口縁部片で、弥生時代前期後葉～中期前葉に帰属する。

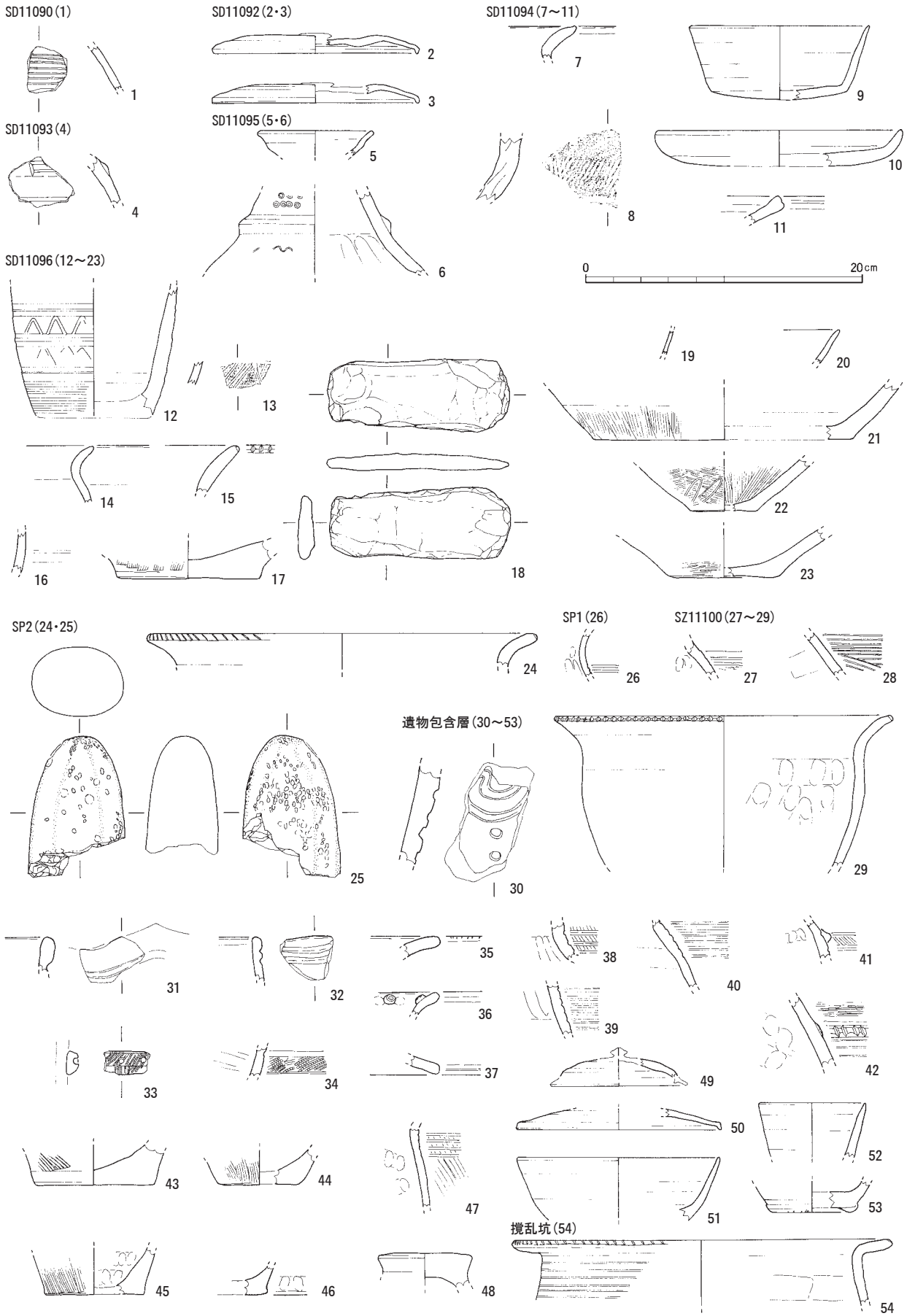
ＳＤ11096出土遺物（12～23）　**12**はおそらく平底の底部から外方へ立ち上がる形態により、器種は壺類や瓶類あるいは鉢類とみられる。外面には２条１単位とした圏線間に篦描山形文を配しており、横帯となる文様帯を構成する。形態や文様構成のほか法量からみると、古墳時代の須恵器に類例を求めにくく、百済土器のような朝鮮半島系土器の可能性がある。**13**は鋸歯文を施す特徴から初期須恵器の高杯形器台などとみられる。**14**は土師器甕。**15**は弥生土器の甕口縁部片。**16**は圏線１条をめぐらした須恵器瓶。**17**は弥生土器の壺底部。**18**は打製石斧。**19**は白磁椀。**20**は灰釉陶器椀。**21**は陶器甕。**22・23**は弥生土器の壺底部。

ＳＰ2出土遺物（24・25）　**24**は弥生土器の甕口縁部片で、口縁端部に刻目を施す。**25**は磨製石斧で、刃部は欠損して基部のみ遺存する。

ＳＰ1出土遺物（26）　**26**は弥生土器の壺頸部片で、篦描沈線２条を施す。

ＳＺ11100出土遺物(27～29)　**27・28**は弥生土器の壺胴部片で、前者は削出段と篦描沈線文、後者は平行と斜行の篦描沈線文を施す。**29**は甕の口縁部～胴部片で、無文となる。

遺物包含層出土遺物(30～53)　**30～34**は縄文土器深鉢で、いずれも渦巻文を配した北白川Ｃ式併行の特徴をもつ。**35・36**は弥生土器の壺口縁部片、**37**は壺用蓋、**38～42**は壺胴部片、**43～46**



第Ⅱ－５図　第192次調査　出土遺物実測図（1/4）

は壺底部片、**47**は甕頸胴部、**48**は甕用蓋となる。**49**は須恵器杯Ｇ蓋で、頂部と口縁端部が欠損する。おそらく宝珠摘みとかえりのある口縁部がつく形態とみられ、飛鳥Ⅲ～Ⅳ期に相当する。**50**は須恵器杯Ｂ蓋で、口縁端部は真下に垂下する。**51**は須恵器杯Ａ、**52**は須恵器提瓶で、いずれも直線的に口縁部が開く。**53**は陶器山茶椀の底部である。

撹乱坑出土遺物（54）　**54**は弥生土器の甕口縁部～頸部で、半截竹管文３条を施す。金剛坂式に相当する。

5　まとめ

第192次調査では、古墳時代の竪穴建物や飛鳥時代の溝など、斎宮成立以前の様相と飛鳥時代の斎宮に関連する遺構の発見があった。第192次調査成果と周辺の既往調査成果を加味して、中垣内地区における斎宮成立以前と飛鳥～奈良時代の斎宮跡関連遺構の様相をまとめておきたい。

（１）第192次調査の成果

本調査の検出遺構は、弥生時代前期後葉～中期前葉の溝・土坑・ピット、古墳時代中期後半～後期前半とみられる竪穴建物、飛鳥～奈良時代の土坑状の溝を確認したが、これら以外の大半は鎌倉時代以降に帰属する。

出土遺物は、すべて破片・細片化しており数量も少ない。縄文時代中期末の深鉢、弥生時代前期後葉～中期前葉の壺・甕、飛鳥～奈良時代の土師器甕・須恵器杯Ｂ蓋、平安時代以降の白磁・陶器類、中世陶器が出土した。

調査の結果、第85－8次の掘立柱塀に対応する西側の塀や掘立柱建物の並びは、明確に検出できなかった。斎宮に関連するとみられる飛鳥～奈良時代の遺構は、土坑状の溝（ＳＤ11092）に限られる。

本調査地から西方は、急峻な段丘崖というよりスロープ状に沖積低地へ下降する傾斜地に相当し、後世の削平あるいは流出のためか遺構等の遺存状況は悪い。本発掘調査の状況とともに地形環境の観点からも、飛鳥～奈良時代は土地利用が低調であったといえる。

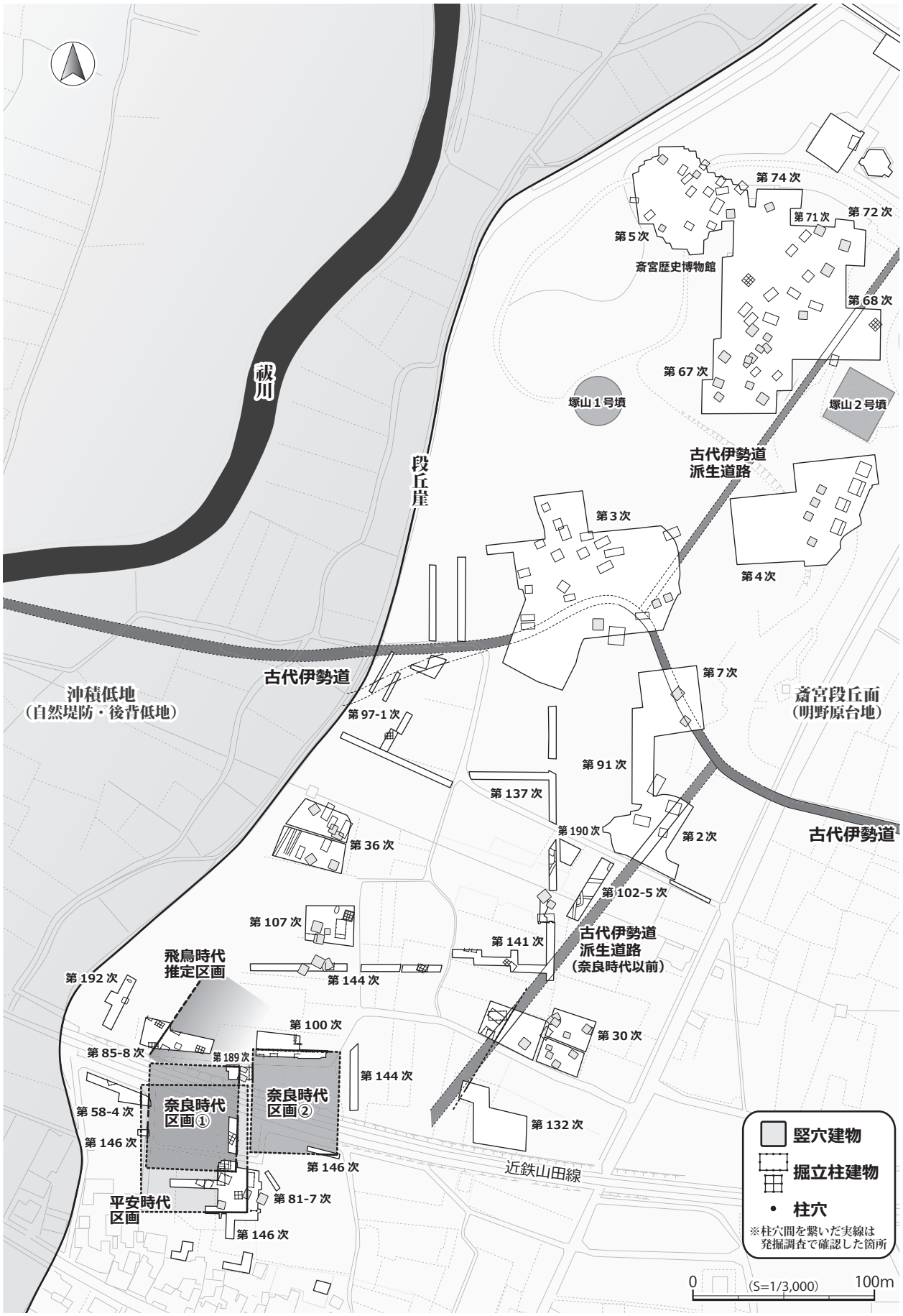
飛鳥時代の斎宮跡関連遺構（斎宮中枢域を区画すると推定されてきた掘立柱塀の配置）は、本調査地のような緩傾斜地に設けるのではなく、本調査地より東方かつ北方の平坦面及び高所に存在するものと想定できる。本調査地での土地利用の低調さを確認できた点が最も重要であり、次年度以降の調査候補地に際しても成果を得たといえる。

（２）飛鳥時代の斎宮中枢域と斎宮成立以前の様相

第85－8次のＮ33°Ｅで並ぶ掘立柱塀及び掘立柱建物群は、飛鳥時代の斎宮中枢域の区画施設とその構成建物と想定してきた。区画施設の囲繞配置は、第192次調査地周辺の西方には存在せずに東方かつ北方への展開となる蓋然性が高い。それについては、第189次の掘立柱建物と竪穴建物の配置が鍵となる。建物構造の相異を勘案すると、第85－8次の掘立柱塀を西辺とし、東辺は掘立柱建物（ＳＢ11015）と竪穴建物（ＳＨ11013・11014）の間隙に相当することで、空間利用の区分がなされている可能性が高い（第Ⅲ－３図参照）。

第85－8次のＳＨ6295は、飛鳥時代の竪穴建物と報告[1]されているが、出土土器から古墳時代中期後半～後期前半に帰属すると考えられる。第192次の竪穴建物（ＳＨ11091）はＳＨ6295と建物配置・規模・構造が似ており、概ね同時期のものと想定できる。「初期斎宮」造営以前には、古墳時代中～後期の集落が形成されていることが判明した。

（１）明和町教育委員会1991『史跡斎宮跡　平成２年度現状変更緊急発掘調査報告』（三重県多気郡明和町斎宮跡埋蔵文化財調査報告8）



第Ⅱ－６図　史跡斎宮跡　中垣内地区　遺構配置図〔全体図〕(1/2,000)

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	弥生土器	壺	SD11090	残存高 3.0	外面:ナデ・篦描沈線文7条 内面:ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	―		001-07
2	須恵器	蓋	SD11092	復原口径 14.6 残存高 1.3	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部 2/12	3と同一個体か	003-06
3	須恵器	蓋	SD11092	復原口径 14.8 残存高 1.4	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	黄灰2.5Y6/2	口縁部 1/12	2と同一個体か	003-07
4	弥生土器	壺	SD11093	残存高 3.3	外面:ナデ・貼付突帯1条 篦描沈線1条 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	―		001-01
5	灰釉陶器	小皿	SD11095 ②～③層	復原口径 8.1 残存高 1.9	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ・ロクロケズリ	密	良	釉:威光茶990 素地:灰黄 2.5Y7/2	口縁部 1/12	口縁部内面に灰釉塗布	001-08
6	弥生土器	壺	SD11095 ④～⑤層	残存高 5.9	外面:ナデ・貼付突帯1条・櫛描 波状文・竹管による刺突文 内面:ナデ	密	良	明黄褐 10YR6/6	頸部 2/12		001-09
7	土師器	甕	SD11094 ②層	残存高 2.3	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄褐 10YR7/4	口縁部 1/12未満		001-04
8	須恵器	壺	SD11094 ②層	残存高 4.5	外面:タタキ・ナデ・ヘラケズリ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	―		001-02
9	須恵器	杯	SD11094 ③～④層	復原口径 12.7 残存高 5.4	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ・ロクロケズリ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12 底部4/12	口縁部内・外面に自然釉付着	001-03
10	土師器	皿	SD11094 ③～④層	復原口径 17.6 残存高 2.2	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部 1/12		001-06
11	弥生土器	壺	SD11094 ③～④層	残存高 2.0	外面:ナデ 内面:ナデ	やや粗	良	橙5YR7/6	口縁部 1/12		001-06
12	須恵器?	壺・瓶?	SD11096 ①～③層	最大径 6.0 残存高 9.3	外面:ロクロナデ・カキメ 圏線2条1対が3帯・ 山形文2段構成 内面:ロクロナデ	密	良	釉:海松茶817 素地:灰黄 2.5Y7/2	胴まわり 2/12	内・外面に自然釉付着 朝鮮半島系土器か?	003-01
13	須恵器	高杯形器台?	SD11096 ①～③層	残存高 1.7	外面:ロクロナデ・鋸歯文 内面:ロクロナデ	密	良	外面:暗灰N3/0 内面:灰黄褐 10YR5/2	―		002-04
14	土師器	甕	SD11096 ①～③層	残存高 2.7	外面:ナデ 内面:ナデ	やや密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/12未満		002-01
15	弥生土器	甕	SD11096 ①～③層	残存高 3.4	外面:ナデ・口縁端部刻目 内面:ナデ	やや密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/12未満		002-02
16	須恵器	瓶?	SD11096 ①～③層	残存高 3.0	外面:ロクロナデ・圏線1条 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄褐10YR6/3	―	内・外面に自然釉付着	002-06
17	弥生土器	壺	SD11096 ①～③層	復原底径 8.9 残存高 2.7	外面:ハケ 内面:ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	底部 3/12		002-03
18	石製品	打製石斧	SD11096 ①～③層	長さ 13.2 幅 5.3 厚さ 1.2	側面に抉りをもつ 刃部は摩耗(使用痕顕著)	―	―	―	完形	重量155g	002-05
19	白磁	椀	SD11096 ④～⑤層	残存高 1.8	外面:施釉 内面:施釉	密	良	釉:青白橡989 素地:灰白 2.5Y7/1	―		003-02
20	灰釉陶器	椀	SD11096 ④～⑤層	残存高 2.5	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:鶯色818 素地:浅黄 2.5Y7/3	―	内面に施釉	003-03
21	陶器	甕	SD11096 ④～⑤層	復原底径 18.2 残存高 4.0	外面:ハケのち板ナデ・ナデ 内面:ナデ	密	良	釉:鶯茶814 素地:灰黄褐 10YR6/2	底部 1/12		003-04
22	弥生土器	壺	SD11096 ④～⑤層	復原底径 7.3 残存高 3.8	外面:ヘラミガキ・ナデ 内面:粗いハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部 3/12		003-05
23	弥生土器	壺	SD11096 ④～⑤層	復原底径 7.2 残存高 3.6	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	密	良	灰黄褐10YR6/2	底部 3/12		004-01
24	弥生土器	甕	SP2	復原口径 26.8 残存高 1.7	外面:ナデ・口縁端部刻目 内面:ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部 1/12		004-03
25	石製品	磨製石斧	SP2	長さ 10.2 幅 6.9 厚さ 5.2	両刃石斧 敲打痕顕著	―	―	―	刃部欠損 基部残存	重量424g	004-04
26	弥生土器	壺	SP1	残存高 3.0	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	橙2.5YR6/8	―		004-02

第Ⅱ－２表　第192次調査 遺物観察表①

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
27	弥生土器	壺	SZ11100	残存高 3.0	外面:ヘラミガキ・ 削出段・篦描沈線2条 内面:ナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	—	削出段に縁取沈線	004-05
28	弥生土器	壺	SZ11100	残存高 3.1	外面:ナデ・篦描沈線8条・ 斜行の篦描沈線3条 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	—		004-06
29	弥生土器	甕	SZ11100	復原口径 24.0 残存高 11.0	外面:ナデ・口縁端部刻目 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12未満		007-03
30	縄文土器	深鉢	包含層	残存高 7.2	外面:ナデ・渦巻状文様・ 棒状工具による刺突文 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	—		004-07
31	縄文土器	深鉢	包含層	残存高 2.4	外面:ナデ・渦巻状文様 内面:ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12未満	波状口縁	005-03
32	縄文土器	深鉢	包含層	残存高 3.2	外面:ナデ・沈線2条 内面:ナデ	密	良	明褐7.5YR5/6	—	波状口縁	006-02
33	縄文土器	深鉢	包含層	残存高 1.7	外面:縄文施文・ 棒状工具による刺突文 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	—	剝離した貼付突帯	005-04
34	縄文土器	深鉢	包含層	残存高 2.1	外面:ナデ・沈線2条・縄文施文 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	—		005-02
35	弥生土器	壺	包含層	残存高 1.4	外面:ナデ・口縁上端部刻目 内面:ナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	口縁部 1/12未満		007-01
36	弥生土器	壺	包含層	残存高 1.6	外面:ナデ 内面:ナデ・円形浮文	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満		006-09
37	弥生土器	壺用蓋	包含層	残存高 0.9	外面:ナデ 内面:ナデ・円形浮文	密	良	明赤褐5YR5/6	裾部 1/12未満		007-02
38	弥生土器	壺	包含層	残存高 2.7	外面:粗いハケのちナデ・ 篦描沈線3条 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	—		005-07
39	弥生土器	壺	包含層	残存高 3.6	外面:ナデ・篦描沈線6条 内面:ナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	—		006-04
40	弥生土器	壺	包含層	残存高 5.5	外面:ナデ・篦描沈線6条 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	—		006-07
41	弥生土器	壺	包含層	残存高 2.9	外面:ハケのちナデ・削出段・ 下地沈線1条 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	—	貼付突帯が剝離	005-05
42	弥生土器	壺	包含層	残存高 5.0	外面:ヘラミガキ・刻目貼付 突帯・篦描沈線3条 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	—		006-08
43	弥生土器	壺	包含層	復原底径 8.0 残存高 3.0	外面:ハケ・ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい褐 7.5YR5/4	底部 2/12		005-01
44	弥生土器	壺	包含層	復原底径 5.2 残存高 2.6	外面:ハケ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部 1/12		006-03
45	弥生土器	甕	包含層	復原底径 6.6 残存高 3.5	外面:ハケのちナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	底部 2/12		005-09
46	弥生土器	甕	包含層	残存高 2.1	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	底部 1/12		005-06
47	弥生土器	甕	包含層	残存高 5.8	外面:ハケのちナデ・ 半截竹管文2条 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	—	外面に煤付着	005-10
48	弥生土器	甕用蓋	包含層	摘部径 4.3 残存高 2.4	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	摘部 10/12		006-06
49	須恵器	杯G蓋	包含層	復原口径 10.0 残存高 1.3	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	灰5Y5/1	—		006-01
50	須恵器	杯B蓋	包含層	復原口径 14.7 残存高 1.5	外面:ロクロナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	にぶい黄 2.5Y6/3	口縁部 1/12		006-05
51	須恵器	杯	包含層	復原口径 14.5 残存高 4.3	外面:ロクロナデ・ナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12		007-04
52	須恵器	平瓶	包含層	復原口径 7.6 残存高 4.0	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部 1/12		005-08
53	陶器	椀	包含層	復原口径 5.6 残存高 2.3	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	浅黄2.5Y7/3	底部 4/12	貼付高台・糸切痕	008-01
54	弥生土器	甕	樹木根痕	復原口径 26.8 残存高 4.9	外面:ナデ・口縁上端部刻目 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 1/12		003-08

第Ⅱ－３表　第192次調査 遺物観察表②

Ⅲ　第192次調査周辺の既往調査

1　既往調査の把握と目的

第192次調査周辺の既往調査として、史跡斎宮跡「中垣内地区」で検出された遺構群を時代ごとに概観したい。ここでは特に第58－4次・85－8次・100次・144次の一部・189次調査を取り上げて、全体の遺構配置図と重要遺構の平・断面図を掲載する。「初期斎宮」と呼ばれる飛鳥・奈良時代の斎宮中枢域、その前史を含めた関連遺構を評価するためにある。また、既刊の発掘調査概報では、未掲載であった重要遺構の出土品についても、今回新たに資料化を行った。なお、再実測のち再収録した出土遺物が含まれる。

飛鳥・奈良時代の斎宮中枢域の実態解明に基づく「中垣内地区」の今日的な位置づけを行うために、既往調査の把握と出土品の資料化は、検討の俎上にあげる基礎的な作業として一定の意義があると考える。以下により、遺構配置と出土遺物の様相を基調とした各時期の特徴について概観し、後年にひかえた史跡西部（中垣内地区）の総括的な報告に備えておきたい。

2　各時期の特徴

弥生時代（第Ⅲ－１図）　前期に帰属する遺構は、大型土坑が主体を占める。第189次のＳＫ11011下面のピットは、打製石鏃をもつ前期弥生土器の壺を棺身とした土器棺墓とみられる。当該遺構の分布域は直径約120ｍの範囲であり、近畿地方や伊勢湾岸域の一般的な前期の環濠(壕)集落の規模と遜色ないため、後世の削平を考慮すると本来は平地建物あるいは竪穴建物数棟が存在した集落の可能性がある。中垣内地区より南方約600ｍに位置する金剛坂遺跡第７次調査では、2～3条の環壕囲繞が認められ、その直径は約100ｍを測る（明和町による発掘調査[(1)]）。環壕内部は発掘調査が行われておらず、後世の削平もあって環壕内部及び周辺に居住遺構が存在するか詳細は不明である。環壕出土土器は一定量が存在するので、現況では環壕集落とみておきたい。「金剛坂式（在地型遠賀川系）土器」設定の標識遺跡であり、いずれも弥生時代前期後葉～中期前葉に比定される。

中～後期の方形周溝墓群は、当該地での分布をみせずに土坑が散在するに留まる。土地利用が消極的な空間とみられ、いわば斎宮跡（古里遺跡）と金剛坂遺跡の墓群構成の間隙地帯と想起させる。異なる出自集団の墓群の間に、一定の空閑地が存在したと想定できる。

古墳時代（第Ⅲ－２図）　一辺約３ｍ程度で造付カマドをもつ竪穴建物が点在し、いずれも小型の建物であり土師器のみ出土する。特に第85－8次のＳＨ6300では台付甕と丸底甕の共伴が認められ、甕や高杯を指標とするとＴＫ23～47型式期からＴＫ10型式期に該当するとみられる。南勢地域における古墳時代の土師器編年が確立していないため、詳細な時期比定は課題として残るが、少なくとも中～後期には竪穴建物5棟程度で構成される集落とみてよい。それらの分布域は直径約70ｍの範囲に収まり、小規模かつ短期間存続の新規集落が段丘縁辺に進出したと考えられる。伊勢湾西岸域における古墳時代集落の動態からみても大きな異同はなく、当該期に増加する耕地開発あるいは手工業生産を契機とした集落と想定できる。

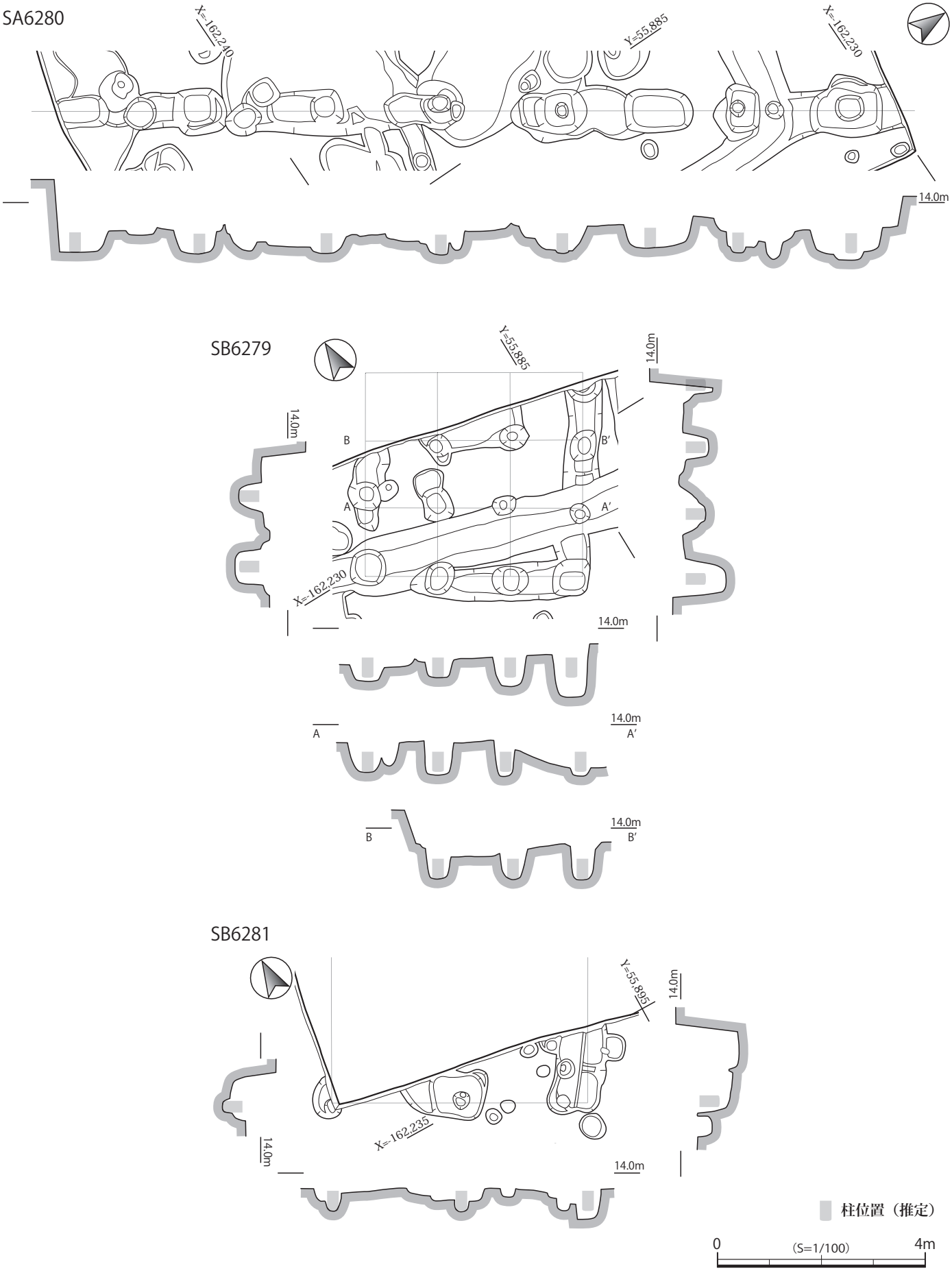
飛鳥・奈良時代（第Ⅲ－３図）　第81－7次のＳＨ5977及び遺物包含層中より、鉄滓と鞴羽口（第Ⅲ－６図：18～20）の出土があり、第189次にもＳＨ11014出土とみられる鞴羽口と椀形滓がある。これらは飛鳥Ⅲ期に比定され、飛鳥時代の斎宮中枢域と推定される掘立柱塀の方形区画の出現より先行する。小規模な鉄器加工といった工房とみられ、斎宮中枢域の造営を支えた施設が点在していた公算が大きい。

第85－8次のＳＡ6280・ＳＢ6281は土師器甕（第Ⅲ－６図：37・38）の出土があり、それ以

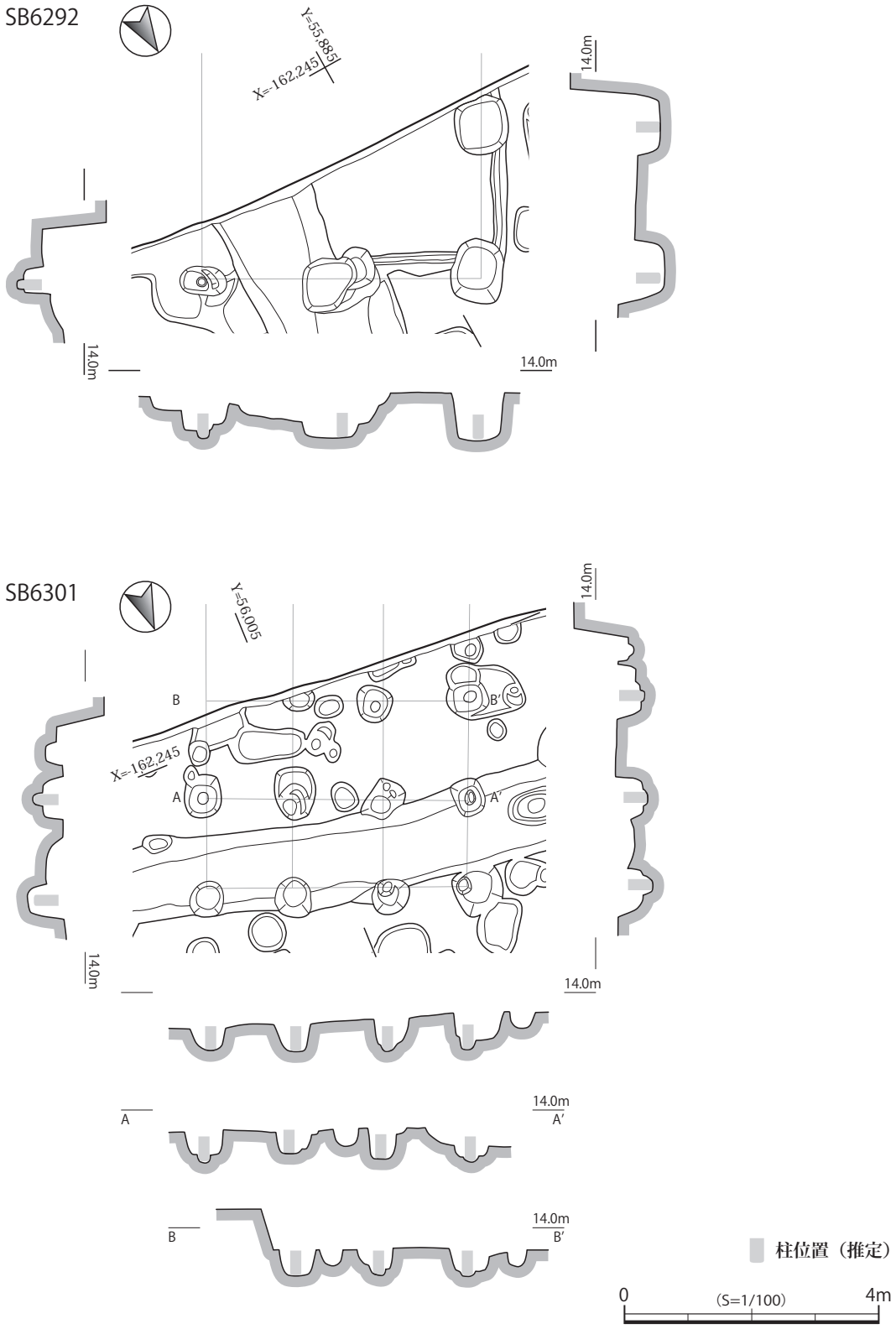
第Ⅲ－１図　史跡斎宮跡　中垣内地区　遺構配置図〔弥生時代〕(1/500)

第Ⅲ－２図　史跡斎宮跡　中垣内地区　遺構配置図〔古墳時代〕(1/500)

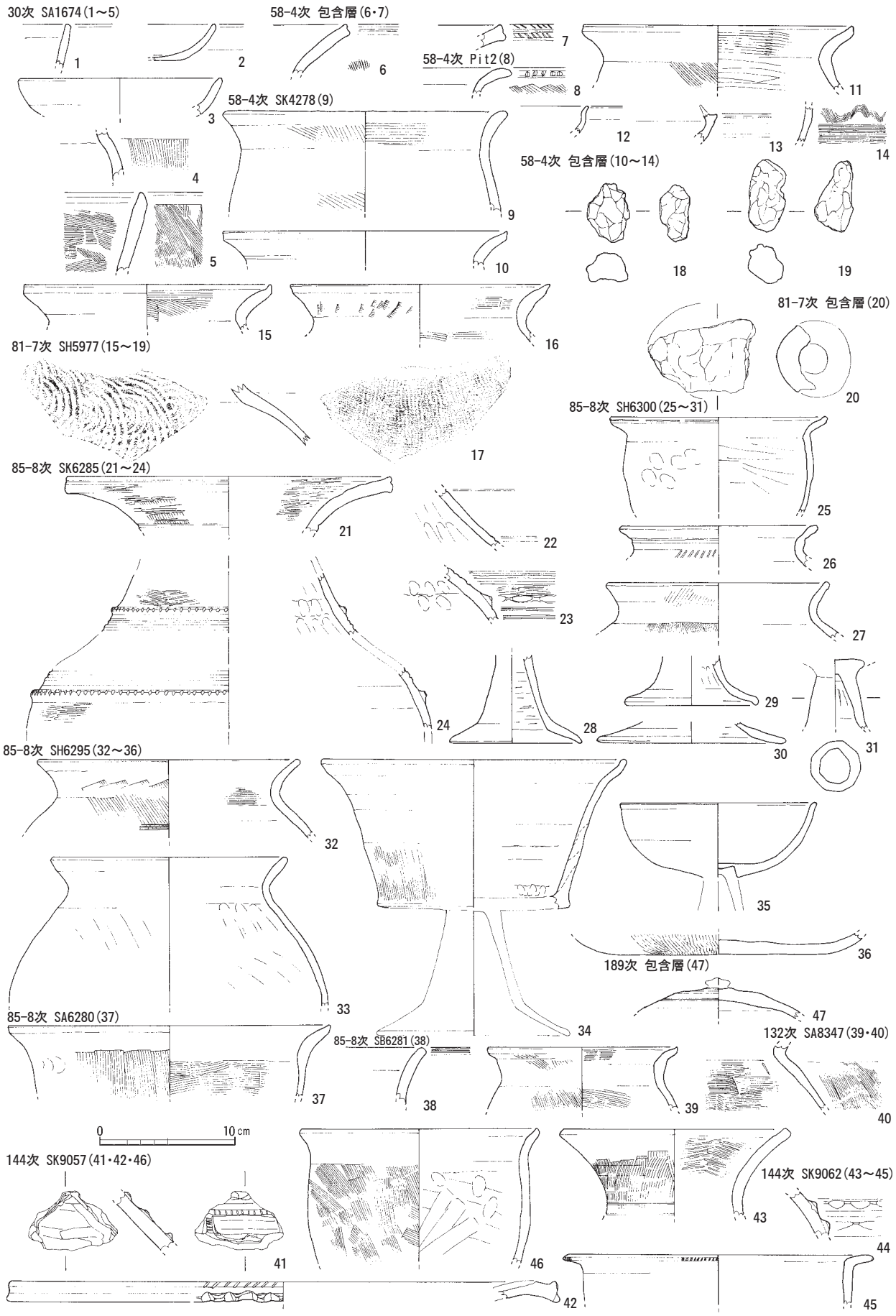
第Ⅲ－３図　史跡斎宮跡　中垣内地区　遺構配置図〔飛鳥・奈良時代〕(1/500)



第Ⅲ－４図　史跡斎宮跡第85－8次調査　塀・掘立柱建物①　遺構平・断面図（1/100）



第Ⅲ－５図　史跡斎宮跡第85－8次調査　掘立柱建物②　遺構平・断面図（1/100）



第Ⅲ－６図　第30・58-4・81-7・85-8・132・144・189次調査　遺物実測図（1/4）

外は小片のため図化し得ない。出土土器から、飛鳥時代と特定するに至らない点は注意が必要である。

第30次のＳＡ1674、第132次のＳＡ8347は、Ｎ30°Ｅで並ぶ柱間約2.8ｍの掘立柱塀であり、奈良時代前期に比定されている。出土遺物（第Ⅲ－６図：1～5、39・40）からは飛鳥時代に遡る可能性が認められる。古代伊勢道から南側へ派生する直線道路（Ｎ33°Ｅ、幅員約８ｍ）の廃絶後に配置するとみてよい。外郭施設あるいは別の区画かどうかの実態解明が課題となる。

（1）未報告資料のため、調査概要は明和町斎宮跡・文化観光課の乾哲也氏、味噌井拓志氏にご教示を得た。

3　出土遺物

調査次数ごとに主要遺構の出土品を抽出し、実測図と観察表を掲載した（第Ⅲ－６図、第Ⅲ－１・２表）。調査地点は第Ⅱ－１図及び第Ⅱ－６図に示したが、各調査の詳細は末尾にまとめた文献を参照いただきたい。なお、平成16年度以前の遺構表示記号は、建物遺構をすべて「ＳＢ」と表記している。ここでは竪穴建物のみ「ＳＨ」に変換したが、遺構番号は変更していない。

【史跡斎宮跡「中垣内地区」にかかる発掘調査概報】

第30次　三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所1981『史跡斎宮跡―発掘調査概報―』（三重県斎宮跡調査事務所年報1980）

第58－4次　三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所1986『史跡斎宮跡―発掘調査概報―』（三重県斎宮跡調査事務所年報1985）

第81－7次　明和町1990『史跡斎宮跡　平成元年度現状変更緊急発掘調査報告』（三重県多気郡明和町斎宮跡埋蔵文化財調査報告7）

第85－8次　明和町教育委員会1991『史跡斎宮跡　平成２年度現状変更緊急発掘調査報告』（三重県多気郡明和町斎宮跡埋蔵文化財調査報告8）

第132次　斎宮歴史博物館2003『史跡斎宮跡　平成13年度発掘調査概報』

第144次　斎宮歴史博物館2006『史跡斎宮跡　平成16年度発掘調査概報』

第189次　斎宮歴史博物館2018『史跡斎宮跡　平成28年度発掘調査概報』

第192次　本書

番号	調査次数	器種	器形	地区遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	30	土師器	杯	SA1674	残存高 3.3	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	―		001-04
2	30	土師器	杯	SA1674	残存高 2.7	外面:ナデ・ヘラケズリ 内面:ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部 1/12未満		001-03
3	30	土師器	杯	SA1674	復原口径 14.6 残存高 2.7	外面:ナデ・ヘラケズリ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12未満		001-05
4	30	土師器	甕	SA1674	残存高 3.7	外面:ナデ・ハケ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	―		001-01
5	30	土師器	甑	SA1674	残存高 5.8	外面:ハケ・ナデ 内面:ハケ・ナデ	密	良	橙5YR7/8	―		001-02
6	58-4	弥生土器	壺	包含層	残存高 3.7	外面:ハケのちナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12未満		001-08
7	58-4	弥生土器	壺	包含層	残存高 1.7	外面:ナデ、口縁端部刻目 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 1/12未満		001-04
8	58-4	弥生土器	甕	Pit2	残存高 2.0	外面:ナデ・ハケ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満		001-01
9	58-4	土師器	甕	SK4278	復原口径 20.3 残存高 7.5	外面:ナデ・ハケ 内面:ナデ	密	良	灰黄褐 10YR5/2	口縁部 1/12		001-05
10	58-4	土師器	甕	包含層	復原口径 20.8 残存高 2.5	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい褐 7.5YR6/4	口縁部 1/12未満		001-07
11	58-4	土師器	甕	包含層	復原口径 19.8 残存高 4.8	外面:ナデ・ハケ 内面:ナデ・ハケ	密	良	灰黄褐 10YR6/2	口縁部 1/12未満		001-09
12	58-4	須恵器	杯	包含層	残存高 2.0	外面:ナデ・ヘラケズリ 内面:ナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	口縁部 1/12未満		001-03
13	58-4	須恵器	杯	包含層	残存高 2.1	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	暗灰黄2.5Y6/1	口縁部 1/12未満		001-02

第Ⅲ－１表　第30・58-4・81-7・85-8・132・144・189次調査　遺物観察表①

番号	調査次数	器種	器形	地区遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
14	58-4	須恵器	高杯	包含層	残存高 2.6	外面:ロクロナデ・カキメ・櫛描波状文 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部 1/12		001-06
15	81-7	土師器	甕	SH5977	復原口径 18.0 残存高 3.3	外面:ナデ 内面:ナデ・ハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12		001-01
16	81-7	土師器	甕	SH5977	復原口径 18.8 残存高 4.3	外面:ハケのちナデ 内面:ナデ・ハケ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 2/12		001-02
17	81-7	須恵器	甕	SH5977	残存高 4.0	外面:タタキのちカキメ・ナデ 内面:ナデ・当て具痕	密	良	灰5Y5/1	―		001-03
18	81-7	―	鉄滓	SH5977	長さ 5.4 幅 2.7 厚さ 2.8	―	密	良	―	―	重量 37.47g	002-01
19	81-7	―	鉄滓	SH5977	長さ 4.3 幅 3.1 厚さ 2.2	―	密	良	―	―	重量 28.47g	002-02
20	81-7	土製品	鞴羽口	包含層	外径 5.6 内径 2.6 残存長 7.9	―	密	良	灰黄2.5Y6/2	―		001-04
21	85-8	弥生土器	壺	SK6285	復原口径 23.6 残存高 3.9	外面:ハケのちヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	密	良	にぶい褐 7.5YR5/3	口縁部 5/12		004-01
22	85-8	弥生土器	壺	SK6285	残存高 4.1	外面:ナデ・削出段・篦描沈線1条以上 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	―		003-06
23	85-8	弥生土器	壺	SK6285	残存高 3.9	外面:ヘラミガキ・指づくね貼付突帯・篦描沈線5条以上 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	―		003-05
24	85-8	弥生土器	壺	SK6285	残存高 11.5	外面:ナデ・刻目貼付突帯・篦描沈線6条以上 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	頸・胴部 2/12		003-07
25	85-8	土師器	甕	SH6300	復原口径 15.6 残存高 7.0	外面:ナデ 内面:ナデ・板ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	口縁部 2/12		003-04
26	85-8	土師器	甕	SH6300	復原口径 14.2 残存高 3.1	外面:ハケ・ナデ 内面:ハケ・ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12		002-05
27	85-8	土師器	甕	SH6300	復原口径 16.0 残存高 4.1	外面:ハケのちナデ・ハケ 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12未満		003-01
28	85-8	土師器	高杯	SH6300	復原底径 9.3 残存高 6.5	外面:ナデ・ヘラケズリ 内面:ヘラケズリ	密	良	橙5YR6/6	底部 1/12		002-02
29	85-8	土師器	高杯	SH6300	復原底径 9.4 残存高 3.7	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 4/12		003-02
30	85-8	土師器	高杯	SH6300	復原底径 12.8 残存高 1.6	外面:ナデ 内面:ナデ・ヘラケズリ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12		003-03
31	85-8	土師器	高杯	SH6300	残存高 5.2	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	―		002-06
32	85-8	土師器	甕	SH6295	復原口径 18.8 残存高 5.9	外面:ハケ・ナデ 内面:ハケのちナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部 3/12		002-01
33	85-8	土師器	甕	SH6295	復原口径 16.9 残存高 11.0	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12		001-02
34	85-8	土師器	高杯	SH6295	復原口径 22.0 残存高 11.0	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12	再実測 再掲載	R2
35	85-8	土師器	高杯	SH6295	復原口径 14.1 残存高 5.6	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	口縁部 2/12		002-04
36	85-8	土師器	甕	SH6295	残存高 1.6	外面:ハケ 内面:ナデ	密	良	灰黄2.5YR7/2	―		001-03
37	85-8	土師器	甕	SA6280	復原口径 23.5 残存高 5.2	外面:ハケ・ナデ 内面:ハケ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 1/12		001-01
38	85-8	土師器	甕?	SB6281	残存高 4.3	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12未満		002-03
39	132	土師器	甕	SA8347	復原口径 13.9 残存高 4.5	外面:ハケ・ナデ 内面:ハケ・ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12		030-01
40	132	土師器	甕	SA8347	残存高 4.8	外面:ハケ・ナデ 内面:ハケ・ナデ	密	良	橙5YR6/6	―		030-02
41	144	弥生土器	壺	SK9057	残存高 4.3	外面:ナデ・刻目貼付突帯3条 内面:ナデ	密	良	灰黄褐10YR5/2	―		031-04
42	144	弥生土器	壺	SK9057	復原口径 39.9 器高 1.5	外面:ナデ・口縁端部刻目 内面:ナデ	密	良	黄灰2.5Y5/1	口縁部 1/12未満		032-01
43	144	弥生土器	壺	SK9062	復原口径 16.2 残存高 6.3	外面:ハケ・ナデ 内面:ハケ・ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12		031-03
44	144	弥生土器	壺	SK9062	残存高 3.3	外面:ナデ・指づくね貼付突帯2条 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	―		031-02
45	144	弥生土器	甕	SK9062	復原口径 21.7 残存高 3.6	外面:ナデ・口縁端部刻目 内面:ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12		031-01
46	144	土師器	甕	SK9057	復原口径 17.1 残存高 9.9	外面:ナデのち板ナデ 内面:ハケ・ナデ	密	良	黄灰2.5Y5/1	口縁部 1/12		032-02
47	189	須恵器	蓋	包含層	残存高 2.3	外面:ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロケズリ・ロクロナデ	密	良	にぶい黄 2.5YR6/3	―		002-07

第Ⅲ－２表　第30・58-4・81-7・85-8・132・144・189次調査　遺物観察表②

調査区全景（南西から）

調査区全景（南から）

写真図版２

調査区全景（西から）

調査区全景（北から）

竪穴建物ＳＨ11091（北西から）

溝ＳＤ11092（北西から）

写真図版４

第192次調査出土遺物（１）

第192次調査出土遺物（２）

報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと　へいせいにじゅうきゅうねんどはっくつちょうさがいほう
書名	史跡斎宮跡　平成29年度発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	川部浩司
編集機関	斎宮歴史博物館
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL0596-52-3800
発行年月日	西暦　2018年11月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
斎宮跡（さいくうあと）	多気郡（たきぐん）明和町（めいわちょう） 斎宮（さいくう）・竹川（たけがわ）	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	20171201 ～ 20180315	166.6㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎宮跡 第192次	官衙	縄文・弥生・ 古墳・飛鳥・ 奈良・平安・ 鎌倉	竪穴建物・ 溝・土坑	縄文土器・弥生土器・ 土師器・須恵器・ 灰釉陶器・無釉陶器・ 白磁・石製品	古墳時代中～後期の竪穴建物群で構成される集落を確認した。

要約	史跡斎宮跡の西部に位置する「中垣内地区」で、飛鳥・奈良時代の斎宮中枢域と想定される地点の発掘調査。飛鳥時代の斎宮跡関連遺構（斎宮中枢域を区画すると推定される掘立柱塀の配置）は確認できなかった。緩傾斜地に相当する本調査地では、飛鳥～奈良時代の土地利用の低調さを確認できた点が重要となる。飛鳥～奈良時代の斎宮中枢域は、本調査地より東方かつ北方の平坦面及び高所に存在することが明らかとなった。 古墳時代中～後期には、竪穴建物５棟程度で構成される集落の存在が判明した。当該期に増加する耕地開発あるいは手工業生産を契機とした、小規模かつ短期間存続の新規集落が段丘縁辺に進出したと想定される。

史　跡　斎　宮　跡
平成29年度
発 掘 調 査 概 報
2018年11月29日
編集・発行　斎 宮 歴 史 博 物 館
印　　刷　光出版印刷株式会社